

国際関連情報 Report from IASB

IASB 着任の報告

ふじわら ゆき
IASB 客員研究員 藤原 由紀

昨年夏からの企業会計基準委員会（ASBJ）への出向を経て、本年4月に客員研究員として国際会計基準審議会（IASB）に着任しました。最近のASBJからの派遣者はIFRS解釈指針委員会を担当することが多かったのですが、私はリサーチに配属となり、現在は主に概念フレームワークを担当しています。概念フレームワークは本年中の最終公表に向け、現在スタッフの作業も大詰めを迎えています。プロジェクトの意義や内容については次号以降でご紹介するとして、本稿では、業務開始後3か月を経過して、IFRS財団のロンドンオフィスについて感じたことを少し述べてみたいと思います。なお、以下の文中の意見にわたる部分は、すべて個人的見解です。

IASBはIFRS財団下の基準設定主体であり、2017年7月10日（本稿執筆時）現在で12名のボードメンバーで構成されています（近日中に1名の離任及び3名の新規着任が予定されています）。IFRS財団のロンドンオフィスでは、ボードメンバーに加えて130名程度のスタッフが執務しており、東京のアジア・オセアニアオフィスで4名が執務しています。ロンドンオフィスのスタッフのうち、4割程度がいわゆるテクニカルスタッフであり、ASBJからの派遣者は全員テクニカルスタッフとなります。残りの6割は、コミュニケーション（広報など）、

出版、教育、人事などその他のさまざまな業務を行っています。男女比は、テクニカルスタッフで4:6、その他のスタッフで3:7程度です。

ロンドンオフィスは非常に多様性が高く、30か国以上の国からボードメンバー、スタッフが集まっています。日本人は、現在ボードメンバー1名、スタッフ3名の計4名です。隣の席のスタッフはニュージーランド出身、上司はロシア出身、パディ（日本でいうとメンターやOJTの指導係といった感じでしょうか）はノルウェーとアメリカ出身、といった具合で、まさに多様性の高い都市ロンドンの縮図のようです。

働き方に関しても、金曜日は出勤しないスタッフがいたり、「ドラフトのレビューに集中したいので」という理由で自宅勤務をしたりと日本よりはるかにフレキシブルです。仕事は個人で責任をもって仕上げる部分が多く、働き方に関しても個人の考えが非常に尊重されているように感じます。ちなみに有給休暇はほとんど翌年に繰り越せませんが、多くの人がそのほとんどを使い切っているようです。当然のことながら、自分とチームの仕事を調整して有給休暇を取得することが前提であり、特別な理由なく未消化の有給休暇を残すことは、タイムマネジメントがうまくできていない証拠だと見られているように思います。

人材の入れ替わりも非常に活発で、私が着任してから3か月の間に、10名ものスタッフが退職し、同程度のスタッフが新たに加わりました。スタッフのバックグラウンドもさまざまで、この多様性の高さ、流動性の高さが、この組織の大きな特徴であり、強みになっていると感じます。また、世界中で使われる基準の設定を使命とする組織である以上、このような多様性の高さが必要不可欠なのではないかとも思います。私が今まで働いてきた組織とは大きく異なる環境のため、最初は戸惑いもありましたが、個々人が尊重され、また他国からのスタッフの受け入れ、特に英語が母国語ではないスタッフの受け入れにも慣れているため、非常に働きやすい環境だと思います。

さて、この3か月の間に起こったIASBにとって最も重要な出来事といえば、IFRS第17号「保険契約」の公表ではないでしょうか。公表までに20年を要した大型基準で、しかも「保険契約に関する初めての、真の意味で国際的なIFRS基準」の公表ということで、公表当日はお祝いメールが飛び交ったり、保険チームのスタッフがお祝いディナーのためにドレスアップしていたりと祝賀ムードでした。私はもちろんこの基準の策定に何の貢献もしていませんが、たまたまこの祝賀の場に立ち会えてうれしく思いました。

IASBの基準開発は、IFRS第9号「金融商品」、IFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」、IFRS第16号「リース」、そして前述のIFRS第17号と、この数年で大型の基準が続けて最終化され、これからの数年間はBetter Communicationに軸足を置きつつ、これらの大型基準の適用支援に力を割いていくことが予定されています。また、外に目を向けると、イギリスは歴史的な転換点であるブレグジットの真っ只中にあり、先を見通すことが難しい時代になっています。

このような時期に、ここロンドンでIASBの業務に携わり、またイギリス社会の動きを肌で感じるができるのは、本当に貴重な経験であると思っています。基準のより深い理解や英語力の向上をはじめとして、取り組まなければならない課題は数多くありますが、限られた期間にできるだけ多くのことを吸収し、また貢献していきたいと思っています。

末尾になりましたが、ASBJへの出向及びIASBへの赴任にあたり、またIASBでの業務に関して、出向元である有限責任監査法人トーマツ及びASBJをはじめとして、本当に多くの皆様に温かい励まし、ご指導、数多くのご支援をいただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。